

第214回くらしの植物苑観察会 2017年1月28日(土)

- 中世人と植物 -

田中 大喜(当館研究部歴史研究系 准教授)

中世に暮らした人びとは、草や木をどのように認識し、利用したのでしょうか。今日は、中世の人々と草・木との関係の一端についてお話ししたいと思います。

1. 中世人と松

「門松をいとなみたてるそのほどに春明がたに夜や成ぬらん」(藤原顥季・『堀河百首』)

「大路のさま、松立てわたして、花やかにうれげなるこそ、またあはれなれ」

(『徒然草』)

院政期(11世紀末)には京都で門松を立てる習慣があり、鎌倉後期(14世紀前半)の京都でも元旦に門松を立てていたことがわかります。上杉本『洛中洛外図屏風』には中世の京都で飾られていた門松が描かれています。

門松の風習は地方でも存在していました

「拾弐月つごもりに本百姓、やとたの御百姓まゐり、御門まつたて申候とき」

(『色部氏年中行事』)

「正月の松かざりの事、毎年相定むるがごとく候。催促せしめ、これを致すべし。

向後においても無沙汰の郷これ有らば、厳密に申し付け、相調うべきものなり。」

(永禄7年(1564)12月19日付北条家朱印状、岡本政秀宛)

「松かざり一門の分調うべき事

一、松竹 一、くゐ(杭)木三本 一、縄一大う 一、わら(藁)二ツ

一、うらじろ(裏白) ゆづりは(譲葉) 一、わりき(割木) 已上、

毎年此くのごとくたるべし。」

(年未詳12月23日付北条家朱印状、伊豆国牧之郷(北条氏直轄領)百姓中宛)

※裏白…シダ類ウラボシ科の常緑草木、葉は50~100cm・表面は鮮緑色で裏面は白色、

夫婦和合・長寿を象徴する

(cf.『洛中洛外図屏風』)

譲葉…高さ6mくらいになる常緑樹、中世でも正月や慶事の飾りに使用された

中世の領主たちは、領内の村々に門松を賦課していたことがわかります。門松は領主の年中行事に必要な物資を上納させる公事の一つと考えられます。領主は、門松を村(百姓に負担させることで自家の年中行事に彼らを参加させ、ともに正月を祝うことを意図したようです。「平和な一年」を正月に領主と百姓と一緒に願ったのです。

松や譲葉は常緑樹＝中世では「常磐木」と呼びました

年中緑で色を変えないという永遠性が祝儀の行事にふさわしいと考えられ、正月の行事に使用されたのでしょうか。

2. 中世人と蜜柑

古代・中世における「菓子」の中心は果物類で、そのなかでも最もポピュラーなものは柑子でした。

『延喜式』諸国貢進菓子によれば、柑子は遠江・駿河・相模・阿波・因幡から貢進されたことがわかります。これらの国々は現在も蜜柑の主要な産地になっています。

また、『徒然草』は柑子の希少性を伝えています。

「神無月の比、栗栖野という所を過ぎて、ある山里にたづね入る事侍りしに、遙かなる苔の細道をふみわけて、心細くすみなしたる庵あり。木の葉に埋もるる懸樋の雫ならでは、露おとなうものなし。閑伽棚に菊・紅葉など折り散らしたる、さすがにすむ人のあればなるべし。かくてもあられけるよと、あわれに見るほどに、かなたの庭に大きな柑子の木の、枝もたわわになりたるが、まわりをきびしく囲いたりしそこ、少しことさめて、この木なからましかばと覚えしか。」

「蜜柑」が文献史料に現れるのは、15世紀になってからです。

「室町殿（足利義持）へ蜜柑二合これを進らす。大通院（栄仁親王）、故北山殿（足利義満）へ毎年進らす。旧例をもって始めてこれを進らす。」
(『看聞日記』応永26年〈1419〉11月26日条)

「柑子二合、室町殿へこれを進らす。(中略)蜜柑、室町殿の好物と云々。病中願物の間、諸人これを進らす。当年の蜜柑得がたきなり。諸人奔走すと云々。蔵光庵に蜜柑有り。所望せしめ、百これを献ず。ただし不足の間、柑子を相副え進らし了んぬ。」
(『同』応永27年11月9日条)

柑子や蜜柑の木は寺院に多く植えられていたようです。絶対的権力者だった室町殿の意に沿うため、彼に仕える武士や公家が先を争って好物＝菓の蜜柑を探し求めた様子が伺えます。

戦国時代（16世紀）になると、武家間で蜜柑の贈答が盛んに行われました。

「この度は参陣を遂げられ苦勞の至りに候。よって現來の間、蜜柑一合・一樽これを進らし候。」
 （天正13年〈1585〉10月17日付北条氏直書状、幡谷越中守宛）

「この度甲州在留致すに付き、兩度まで珍物を送り下され候。遠路の処、ご懇情の至り、申し尽くしがたく存じ候。はたまた駿州名物にて御座候間、蜜柑一箱これを進らし献ず。」

（天正10年〈1582〉9月10日付徳川家康書状、飯田半兵衛宛）

相模も駿河も柑子の貢進国でした…蜜柑栽培は古代以来の柑子栽培の伝統をもとに、16世紀頃から始められたようです。

蜜柑栽培の普及には、接ぎ木の技術が利用されたと考えられます。

「金山より蜜柑を所望申す。その日に一株を俊に接がす。」

『長楽寺永禄日記』永禄8年〈1565〉3月14日条

「この日も接ぎ木に蜜柑を俊にいたさす。柚の木もカラタチに接がするなり。」

『同』同年3月15日条

「翁蔵主、メウタン（妙丹）の枝を持ち来る程に、則ち泉蔵司に接がせつる。」

『同』2月18日条

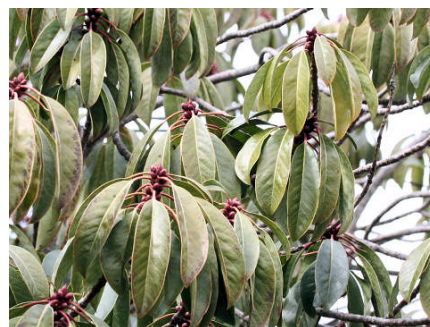
柑橘類の木相互の接ぎ木は可能＝蜜柑も柑子の木に接がれたのでしょ

う。柑子のなかでも特に甘味が強い品種が蜜柑と呼ばれ、その木が接ぎ木によって各地に広まっ

ていったと考えられます。これは、中世人による「甘みの追求」といえます。15世紀には京都から蜜柑の木が柑子栽培を伝統的に行っていた地域に持ち込まれ、盛んに接ぎ木が行われ、16世紀には名物となるくらい栽培が行われ、贈答品にもなったのでしょ



【写真1】 裏白

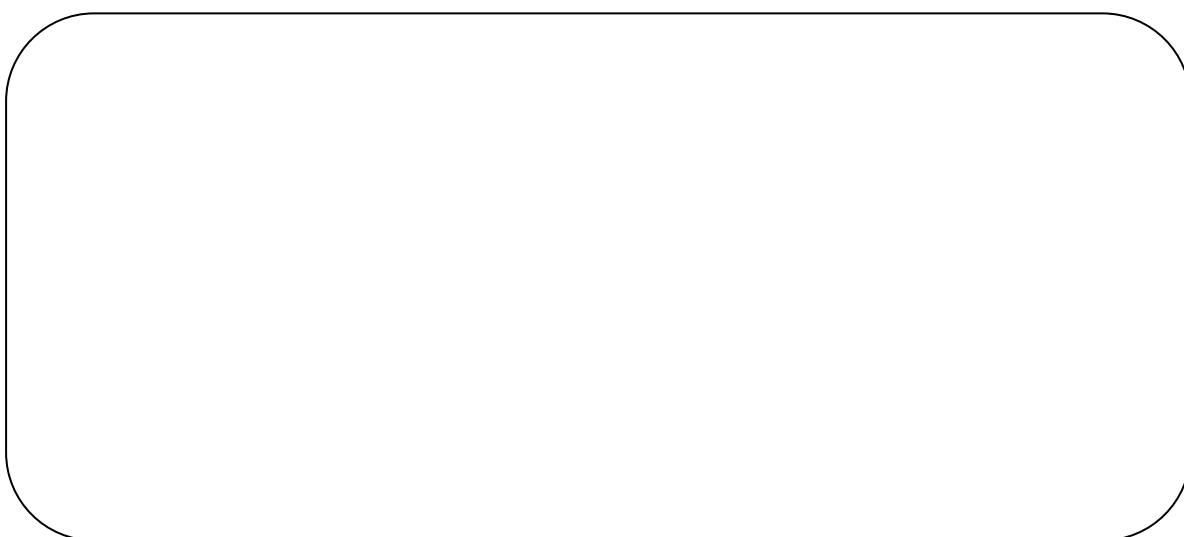


【写真2】 譲葉



【写真3】 柑子

【参考文献】 盛本昌広 『贈答と宴会の中世』（吉川弘文館、2008年）
『草と木が語る日本の中世』（岩波書店、2012年）



.....

次回予告 第215回くらしの植物苑観察会 2017年2月25日（土）
「新春の植物」（辻 誠一郎 東京大学大学院新領域創成科学研究科）
13:30～15:30（予定） 苑内休憩所集合申込不要